
銀姫～シロガネヒメ～

しえぎし

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

銀姫〜シロガネヒメ〜

【Nコード】

N7802B

【作者名】

しえぎし

【あらすじ】

工学革命によって高度に技術が発展し、ついには義肢を必要とする患者は“サイボーグ”と呼ばれるまでになった世界。これは、爆発テロに巻き込まれた大学生アレックスと、銀の義手義足を纏った少女アンナが行くサイエンス・フィクション・トラベルストーリー。

1: Nobody Knows Where I Am (前書き)

この小説は書き始めたときに、余りにも冒頭がアレだったので、話の順序を変えた修正版です。修正する前に見て頂いた読者の方々は申し訳ありません。このように未熟な者ですが、皆様に受け入れられるよう努力して参りますので、どうか温かい目で見守ってやって下さい。それでは、第一話へ……

1: Nobody Knows Where I Am

とても温かくて気持ち良かった。

そう、まるで干したての布団で寝るような、暑すぎず寒すぎない温かさ。こういうのを温もりと言っのだろうか。

委ねればそれこそ一瞬で快楽へと誘う感覚を、いつまでも味わっていたい。むしろ、そのまま連れて行ってほしい。

錯覚なんかじゃない。本能がそれを訴える。睡魔の導くままに落ちていったら、どんなに楽な事だろう。

が、大抵こっの

には何かしらとんでもないことが潜んでいるのがセオリーだ。麻薬みたいなものである。

……いけない。そろそろ考えるのも億劫になつてきた。このまま寝ていたい気もするし、起きなきゃいけない気もする。

さて、俺は――

頑張つて起きる

↓ このまま寝る

……いいや。こんなに気持ち良いのはめつたに味わえないし、麻薬に溺れるとしよう。Mr・ウォッチの講義とサークルの集会が今日でないことを祈りつつ、今日は大学をボーコット……

——大学？

俺は布団から跳び起きた。同時に、昨日の記憶が濁流のように流れ込んできた。

あんな出来事に遭遇してなに呑気に寝ていやがる。

とりあえずは現状把握だ。鈍い頭をフル回転させて、今考えられる事を考える。あれからどうなったのか、今どこにいるのか、あれからどれだけ経ったか、あいつらは無事なのか等々——。

あんな事になるなんて、誰が予想できるだろうか。当たり前だ。

こちらら国際紛争とか政治経済とは全く無縁の、一般の大学生活を謳歌していたただの大学生なんだぞ？

そりゃ幸せに暮らしたいとか、ある程度金持ちになりたいとかそういうのは思うけど、これだって一般論じゃないか。

そう思ってあの大学の門を叩いたっていうのに——なんてことだ……。俺にはそういう一般的な事も成就されないのか。

とにかく今為すべきことは、ここがどこなのかということだろう。怒りや反発心は、心を惑わせる。……焦らず、落ち着いて、はい深呼吸。

さて、俺は今ベッドの上にいる。俺が思っていた純白で干したての布団ではなく、緑色の、シーツすら掛かっていない羽毛布団だった。

と、くると、最低限ここは病院ではない、ということが理解できる。

次に、部屋の中だ。壁も床もコンクリートで出来ていた。ところどころ鉄筋が剥き出して見えるあたり、鉄筋コンクリートだ。

が、それだけだった。強いていえば天井に野球ボール大の電球がぶら下がっていて、十字のふちがある窓と、緑の薄いカーテンがあるだけだ。壁と床がボロつちい事以外特に汚れてはいないし、かといって何かがあるわけではない。

まるで本当に寝るためだけに設けられた、無駄という概念を完璧に取っ払った空間。

と、いうことは、俺の部屋でもない。住んでいるアパートはに鉄筋コンクリートといえどボロボロじゃないし、大体部屋の中はこんなにさっぱりしていない。

と、来ると、いよいよここはどこだろうか。

振り返ってみる。最後に見たのはそう、築50年を超えても一向に老朽化しない、例え震度10を超えても絶対に崩壊しなさそうな校舎が、零れ落とすかのように鉄塊を落としていったこと。

その前に聞いた。あれは爆発音だ。ドカンなんて音、初めて生で聞いた。

そして、おれを襲ったのは瓦礫の雨だった。逃げ道など無い。瓦礫は容赦なく俺の身体を包んでいった。

それが最後に見た記憶。あれからどれくらい経ったかはわからないけど、とりあえず今、俺はこうして生きていてここにいる。

いつまでもこうしているわけにはいかない。わからないなら、自分で確認するだけだ。

幸いにも身体は……よし、動くな。寝ていたせいもあって思うように身体が動かないが、まあ、うろついてれば自然と治るはずだ。そう踏んで、俺は部屋から出た。

建物は5階建てだった。こちら辺はそういった一般のアパートみたいな建物で構成されていた。

が、それは清楚と呼ぶには程遠かった。塗装が剥がれ落ちて中のレンガが見えてしまっている。剥がれ落ちた塗装は、無造作に道に散らばり、倒れたゴミ箱はもはや存在意義を無くしていた。

おまけに、とてつもなく日当たりが悪く、昼なはずなのに暗い。これではまるで路地裏だ。

いや、実際そうなのかもしれない。この荒れ方は見るからに治安が悪そうだ。女の子はこんなとこ来ちゃいけないな。

正直あまり動きたくはない。こんなところを歩き回ったら、何が起きるかわからなくて不気味でしょうがない。なんだろう、この形容できない悪寒は。空間から恐怖が伝わって来るかのよう。そこいらのテーマパークの幽霊屋敷よりホラーチックだ。

だが、今欲しいのは情報だ。あれからどうなったのか、ここはどこなのか、今はいつなのか。

残念な事にテレビもなければ新聞もなかった。せめて日にちだけでも思っても、カレンダーすらなかった。どういふことかと思っただが、外を見て納得。恐らくテレビはおろか、新聞など仕入れる余裕もないのだ。

こないなら行けというのは誰の教えだったか。いちいちこんなことに怯えてたら、そうとう情けないぞ、俺。

立て付けの悪い階段を下り、勇気を振り絞って一歩外に出た。

しばらく歩くと、大通りらしき道に出た。だが、道中全くといっ

ていいほど人気がないのが、逆に不気味だった。

いや、人はいた。だが、あれは人と呼んでいいのだろうか。

そう、あれは俺が何気なく周囲を探索しながら歩いているときだった。歩いても歩いても明るくはならないし、なにより巨大迷路みたいに入り組んでいた。

失敗だった。土地勘もないくせにうかつに散策するものじゃなかった。ここをあとどつていた。おかげで、もといた場所がわからなくなってしまった。

というか、ここで重要な問題が一つ。

空腹だ。

あたりまえだ。とにかく俺は寝ていたのだから。寝ている人間が食事など出来るはずも無い。一気に襲ってきた空腹の波に、意識が昏倒しそうになる。

そんなとき、俺はソレを発見した。いや、正確には発見してしまった、か。

髪の毛の長い、ボロボロの布切れを纏った女が、壁際に腰掛けてるじゃないか……。

女はまるで生気のかけらもない。というか生きているのだろうか。ミイラみたいだ。

っーかヤバイ、こつちを見てますけどー！

一度視界に入れたらあとはミイラ（命名）の独壇場だった。目を合わせなくてもわかる、見つめるだけで一方的に相手を恐怖に陥れるハメプレイ。立場は逆なはずなのに、へびに睨まれたカエルの気分になった。そして、最早この状況に耐え切れずに、一刻も早く立ち去ろうとしていた俺に

「……クスリ……ちょうだい……」 ミイラはザキを唱えた。不気味さが悪寒に昇華した。

もうイヤだ。

いつからこんなジャンルになったのか。

見てはいけない。見てはいけない。見てはいけない。

もう、それを見てはいけない。俺は一目散にその場を立ち去った。

…… あれは酷かった。

もういい、思い出したくもないからこのことは忘れよう。人間、過去のことも未来に向かって進んでいくべきだ。

さて、そんなわけで俺は今、大通りらしきところにいる・・・んだっけ？

さっきの一件で闇雲に逃げ惑っていたら、たまたまここに出た・・・なんて、虫のいい話だなと思うのはなしだ。

なにせ出たのはいいが、そこもただ大通りなだけだった。人気もなければ、明かりもなく、ゴミがちらかり、塗装がはげている。つまるところ、道が広くなっただけで、あとはなにも変わってないのだ。期待はずれだ。いや、こんなところに希望を持ってしまったほうが浅はかなのかもしれない。当たり前だ。これだけ人気がないのだから、一般的に人の多いところに出たところで人が居る保証はない。まるで絶望の象徴みたいなこの街では、一切の未来を断絶させられる。マンガや小説で読んだけど、そのときはこんなに凄惨な環境だとは思いつかなかった。

世界はなんて理不尽なのだろう。

ああ、俺も空腹にのたれ死ぬのか。あのミイラみたいに誰にも助けてもらえず一人死んでいくのか。こんなことならおとなしくベツドの上で家主の帰りを待つていたほうがよっぽど良かった。

…… そうだ、家主はどうしたのだろうか。俺があの家にした以上助けてくれた人間がいるはずだ。いまさら気が付くなんて、俺のまぬけっぷりにはほとほと愛想が尽きた。せつかく救われた命なのに、こつもあつさりと手放してしまうとは。

でも、もういい。どうせ瓦礫にまみれて死ぬ身は死ぬ身だったんだ。助けてくれた人には悪いけど。

瞬間、それはたしかに聞こえた。

遠くで、なにか聞こえる。これは・・・雨音？・・・いや、これは歓声だ。人の声だ。

俺はもう何も考えない。なにも考えないまま、声のするほうに走り出した。

最早それは、条件反射に等しい。道に転がる生ゴミが臭かろうが、瓦礫に足をとられようがしまったこっちゃない。ひたすらに、ただひたすらに声のするほうへ。

駆ける。

駆ける。

おかしい。音は大きくなっているのに、なにも見えてこない。これだけの歓声なのに、それらしき施設がまったくない。

まだ遠いのかと思って歩いてみても今度は声が小さくなってしまった。

とすれば、できる限りの想像から結びつく結論はただ一つ。

探し出すのにはそれほど労力と時間は必要なかった。大通りから左に入って二軒目の、今にも崩壊しそうなボロボロの家屋の一階。地下に続く階段は、たしかにそこにあった。

声のボリュームが最大になる。俺は迷わず階段を下った。

上の暗闇がウソのように明るく、ここは活気に満ち溢れていた。広大な地下空間いっぱいに入込み、歓声が反響する、一種のドームってやつだ。

思えばこういふところははじめてかもしれない。思いっきり戸惑

ったが上にくらべれば天国だ。

そしてすり鉢状のスタジアムは真ん中が円形にくぼんでいた。直径はおよそ十五メートル程度。周りが壁で囲まれているあたり、コロシウムを彷彿とさせる。観客は老若男女問わず。服装から肌の色まですべての人種をこつた返した感じ。見渡せばそれこそ人種万国博覧会。

そんな現状を十分ぐらい見回していると

「レデイス、アードジェントルメン！本日もようこそお越しくださいました！ただいまより、第三百十四回いい、当コロシアムのエキジビションマッチを始めたいと思います！」

渋い男の声が流れて、会場のボルテージも最高潮になった。今どき最初の出だしの一言はどうかと思っただが、今からはじまるであろうイベントでアンタツチャブルにしておいた。

もはや空腹であったことも、当初の目的もわすれて、食い入るように見入った。

会場が一気に暗くなった。無論、停電なんかじゃない。中央の円形がスポットライトに照らされる。

「イーストコーナア、鈍色のオオチンピラ魂イイ。リイイイゼントオオオオ、ニガアアアツウウユウウウ！！！！！」

小柄の、だがいかに柄の悪そうな、それでもってリーゼントがバカ長い男が現われた。俺の脚ぐらいの大きさだ。リーゼントの二つ名は伊達じゃないってことか。

それにしてもニガツユっていうのは——ああ、

「四露死苦」の露と苦をとって苦露ね。ものすごいナンセンスだ。だが、闘気はみなぎっている。ご自慢のリーゼントの迫力もあいまって、威圧感は充分だ。これで体が大きければグッドだったんだけどなあ。

アナウンスは続く。

「続きましてウエストコーナア、銀白のオオコロシアムの妖精イイ。アナアアスタアアシイイアアアア！！！！！」

俺が見た先には見た目がまだ幼い十五、六歳の女の子だった。銀色の髪は遠めから見てもしなやかで、可憐という形容がぴったりだ。バカげてる。いくらここが見た目的に経済がよくないからって、あんな女の子まで出場するなんて。相手のヤツだってチビだけど、それだけだ。ちゃんと骨格もゴツいし、筋肉も服のうえからわかるくらいに盛り上がっている。

あんな華奢な体じゃ到底かないっこない。ワンサイドゲームだ。実際に会場も歓声の中に、少しのどよめきが混じっている。俺と同じように考えるやつがいるのだろう。

だが、既に賽は投げられた。アナウンスが構わずコールする。

「さあ、両者ともはりきって参りましょう！デュエル！！Let
s Fight！！！！」

カーン！！！！

1: Nobody Knows Where I Am (後書き)

銀姫第一話、いかがでしたでしょうか。前書きの方にも書きました通りまだ未熟者なので、皆様からのアドバイスや感想を心待ちにしています。なお、ガンガンの某マンガとはルビが非常に酷似していますが、一切合切関係ないのであしからず。それでは。

2: Heaven Or Hell

遡ること数分前――。

2: Heaven Or Hell

「いいか。あのバカ長いリリースントをくぐっちまえば、あとは血祭りだ」

ここは地下のコロシウム。の、すり鉢状になつた闘技場の観客席の真下にある控え室。

十二メートル四方の真つ白な部屋の中を、四本の真新しい蛍光灯が照らす。青いプラスチック製のベンチに壁には大きなガラス。丁寧に救急セットまでその部屋にはあった。

その部屋に、男女が一组。中年の男――オグルはベンチに座っている女、いや少女に愚痴をもらすように言った。

「わかつてんだろうな。万が一負けるような事があれば、その手足に爆弾つけてやったっていいんだぜ？まあ俺が整備したら負けるはずがないからな」

「寝言は寝てから言いなさいよ若ハゲ。だいたいあなたの整備なんてかえって動きづらくて邪魔なのよ。ネジちゃんと巻いたの？不安で不安でしょうがないわ」「言うじゃねえか色ガキ。そこまで言うなら今ここで取ってみるか？その手足。整備士がいなくてろくに立つ事もできねえくせに、ナマ言つてんじゃねえよ。いいか？今テメエがこの街で生きていられるのは整備士である俺様のおかげだ。それをよくわきまえな。本来なら俺がファイトマネー全部持つていてもいいんだぜ？」

「あなたホントに脳みそとろけちゃってるんじゃないの？何度も笑わせる話、聞かせないでよ。むしろ重石がついで今までなんとかしてきた私に感謝して欲しいわ。鈍くさせるだけが能のド三流のくせに」

両者勝るとも劣らない暴言のラリーは留まる事を知らない。これが試合直前の控え室の光景だろうか。

痺れを切らしたオグルは少女の前に立った。今にも殴りかからんとする勢いで、少女に襲いかか

「ウエストコーナーの選手、スタンバイお願いします」

る直前に、静止が入った。

「チツ・・・」

「入場よ」

「言われなくてもわかってんだよそんなこと！いちいち口だすんじゃない！やねえ！！」

もはや問答は無用とばかりに、少女はオグルの激昂を鼻でフンつとあしらうように受け流した。

「わかってんだろうな。俺の言うとおりに戦わなかったらどうなるか」

「フンツ。知らないわよそんなこと」

「クソガキが。せいぜい今のうちに吠え面かいてな」

少女は白銀の髪を揺らしながら、戦場に歩を進めた。

客席は超満員。あんな朽ち果てた街によくこれだけの人間が住める容量があったのか。

地下深くに掘られたこのドームは、もともとこの街のある意味でのシンボルらしい。

今はどこに逃げたかしのれないこの街の前町長が、もともとこの闘技場を軸に街を発展させるつもりだった。経済的に言えばこういうスタジアムやドームでスポーツの大会を催すなり、有名な歌手を招いてライブを行えば、自然と周囲にある街も潤うからだ。当時不況だったこの街を救うための、いわゆる町おこしの先駆けとして、ドームはこの街に生を受ける予定になっていた。

しかし、なにごとともそううまくはいかない。経済的に不況な街がドームを造るには、到底資金が足りなかった。全天候型ドームを一つ造るのに、どれだけ莫大な金がかかることだろう。

だが、科学・工学が発展したこの時代において、もはやスタジアムというのはどこも受け入れてもらえない。

そこで町長は思案した挙句、一つの回答に行き着いた。

「地上が駄目なら地下に造ってしまえばいい」と。

住民の反対もあったが、町長はそれを権力で強引に捻じ伏せて、半ば独断で地下ドームの建設を執り行なった。

しかし、やはり二兎追うものは一兎も得ず。ギリギリまでコストを減らした結果、スポーツを行うには中途半端な広さになって、結局相手にされなくなってしまった。

町長は失脚。統治者も財力も無くなった街において、住むべき理由はもはや無い。人は去り、街は廃れ、残ったのは貧困という二文字だけだった。

それがこの街とドームにおける事の顛末。欲に溺れたが故に全てを失った悲しい町長のお話。

しかしそんなことは、少なくとも今の銀髪の少女にとって、どうでもいいことだ。地下に掘られた、負の遺産の中心。彼女は其処に立っている。目の先に、小柄だがかい男を見据える。目が変わる。さながら獵犬の目だ。やけに馬鹿でかいリーゼントの不良。二

メートルくらいだろうか。その迫力、威圧感は充分。——これが今回のわたしの獲物か。

稼動確認。少女は手のひらを握ったり開いたりして動作を確かめる。異常なし。もとより感覚などないが、それもまた彼女にとつてはこの場において必要の無いもの。そんなものはどこかに置き去りにしてきてしまった。そう、なにも考える必要はない。たとえば、オグルが何かを企んでいたとしても、一切合切無視しなければいけない。

後ろでなにか言っているオグルをまた無視して。
信じられるのは己のみ。目を逸らした先には死。

少女が今考える事、それは目の前の獲物を狩り賞金をこの手にすることのみ——。

カーン。

ゴングが鳴った。初見は両者様子見から始まる。両者の間隔は十二メートル程。まだ何も届かない。

無論、攻撃を入れるには接近しないとイケない。だが、うかつには飛び込めない。何があるかわからない。平静と冷静と集中を乱した者は真っ先に美味しく料理される。愚の骨頂だ。

そのことをよく弁えているのか、開始から三十秒が経過しても一向に両者の位置が全く動く事は無い。中心の円を見ている観客は、まるで時が止まったような錯覚を覚えることだろう。緊迫した空気がドームをつつみ込み、大歓声はすっかり静まり返ってしまった。

両者はひたすら緊迫に耐える。

「先に手を出したほうが負ける」この事はもはや、今日初めて対峙したにもかかわらず、両者の間で暗黙のルールになりつつあった。そして試合開始、両者が動かなくなってから一分が立とうとしてた頃。

「なにぼさつと突っ立ってんだー！早く試合始めろー！」

る――！

少女は間一髪で危険を察知し、鉛の群れを回避する。円の中心を軸に、時計周りに旋回。

しかし、ニガツユもそれを逃さない。初弾を布石に中央へ陣取り、少女を追尾し、捕捉し、照準する。

オグルが言っていたこと、それは

「新作のアーマーナイフの切れ味を宣伝するために相手のリーゼントをぶった切れ」ということだ。そして、少女のか細い腕に仕込めるナイフの長さは、たかが知れている。すなわち、リーゼントを切り落とすには自然と接近しなければいけない。

だが、これはどうだろう。わずか六〇七メートルの距離にもかかわらず、そのリーゼントに仕込まれているマシンガンにより接近することを断固として許されない。無論、遠距離での攻撃手段を持たない少女は、ひたすら逃げ続けるしかないのだ。弾幕で満たされた境界は、少女にとって何百メートルという距離を容易に体感させた。旋回はまだ続く。熱で山吹色に発色する鉛の雨は、ステージにそって華麗な円を描く。美しいとも形容できなくもないがその言葉は、ことこの場所に限ってそれは適切ではなかった。間違っても、一瞬で人を殺せる凶器だ。

それを約一分間、ひたすらになって逃げ続ける少女がいた。選手のコールがあつた際に、ワンサイドゲームだと囁かれていたが、違つた意味でこれほど一方的になるとは誰が予測出来ただろう。弾倉はまだそこを尽きない。

「ハハハハハア、いいぞ、もっと逃げろお、逃げてくれえ。一瞬でも止まったらそのか弱い身体に風穴タツプリ開けてやるからよお。さあ、どこまで逃げ切れるかなあ、見せてくれよお！」

「くそう、黙つてれば調子にのつて・・・」

遊ばれている。その感覚を理解するには時間が掛かりすぎた。考

えれば簡単な事だ。この一分間二ガツユが少女を追尾しているときに、旋回方向に首をちょこんと捻れば少女は蜂の巣になって死んでいた。つまり、殺ろうと思えばいつでも殺れたのだ。
しかし

ドドドドドドドドドドカチンカチンカチン。

一ラウンド終了まで、残り二十四秒。

ついに、努力が報われた。弾倉が底を尽きたのだ。

義手を覆う肌色を突き破り、ナイフがその姿を現す。もう訪れないであろう一遇のチャンスとばかりに、少女は二ガツユにたたみ掛ける――！

狙うは――

「そのリーゼント、いただき――！」

あれだけの弾幕を形成して、接近を阻んでいたリーゼントヘ――！

ガチン――！

甲高い金属音が響いた。

「な――」

振り下ろしたはずのナイフは、リーゼントの半径ほどで止まっていた。文字通り、刃が通っていなかったのだ。

少女は幻滅した。何故あいつの言うとおりになっていたのだろう。はじめから直に殴っていればこれで終わりだったはずなのに。なにより、あんな金の亡者をのさばらせておくのが間違이었다かもしれないのに。

少女がそんなことを思考するのにコンマ零・四秒。いや、実際は

そこまで掛かっていなかったかもしれない。だが、少なからずもその瞬間に考え事をしてしまった事——即ち、隙が生まれたことは変えられない事実だった。

ニガツユはその僅かに生まれた一瞬の隙を見逃す訳が無い。

その強大なリーゼントを、荒れ狂う大蛇の如く振り回す。

内蔵された銃火器部の鉄製のバレル。そして、その強大な銃の重さを支え、発射される反動に耐える鍛え抜かれた強靱な首。重火器ゆえに、並みの素人がここまで扱う事など、到底不可能。

彼は確かにマシンガンによる射撃が主軸だが、それだけではない。磨かれた反射速度に、銃を扱う技術。その素行の悪そうな容姿とは裏腹に、ニガツユが紛れも無い戦士だということをなにより証明させる。

そして彼のその首を生かせば、細身の鉄棒といえど、骨をも砕く鈍器と化す。当たれば痛いでは到底済まない。

少女もまた、並外れた反射速度で鈍器による一撃を避けた。

しかし、それは回避するために距離を置くものだった。成り行きから言って至極当然の事だ。鉄の風が吹く台風の中で人間がどうやって生きられよう。

再び、振り出しに戻った。この距離は、少女にとって圧倒的に不利だ。

だが、今までその状況を作り出してきた鉛の雨は、もう降らないとすれば、あの台風をかくぐって、目に到達するだけだ。

少女は再び猟犬になる。獲物を狩り取るためのだけの存在。

そこに、余計な考えは一切不要。ただただ、相手を狩る策を練るのみ。猟犬は思案する。あの台風の目に到達するには——。

「なあ。もう弾切れだからって、簡単に近づけると思ってるだろ。そんなのは……」

いつの間にか、台風は止んでいた。

「見当違いだぜ!!」

そして、リーゼントからは鋭いものが無数に生えていた。刃物だ。それらは、ニガツユの一声とともに、一斉に撃ち出された。先程の光景がリフレインする。ここに絶対領域が再構築される。

それは、コロシウム全体を包む軌道だった。三百六十度全方位射撃。いかに手足が鋼であろうとそれだけでは到底足りない。無数に射出されるナイフを、防ぎきることは出来ない。

だが、少女は待っていた。この台風が止む瞬間を。

無数に迫り来るナイフをかわせない。

否、かわさない。

獵犬はチャンス逃がさない。多少の傷はいとなわない。銀の腕で頭部を防ぎ、向かい風の中を疾駆する――！

多少、少女の身体にナイフを掠めながらも、凶器の嵐を抜ける。傍若無人に吹き荒れる台風も、風を当てる対象を誤った。

少女はなおも止まらない。そして射出されたリーゼントの先端を――。

あろうことが拳で打ち抜いた。

鈍い金属音がドームに響く。

事、戦闘に限った話ではないが、何事にも勝敗を決するものには精神論と裏づけされた科学がある。繰り返される紙一重の接戦の中でも、真理はたしかにそこに存在する。

殴ったあとには、首が百八十度近く捻じ曲がっているニガツユの姿があった。

無論、立ってはいない。泡を吹いて、数メートル先で倒れていた。あの最大の武器だったリーゼントは原型を留めてはいない。

その形状と長さ故、先端の重さは根元より遙かにかかる。根元より遙かに衝撃を受けたときの影響が大きいのだ。

ならばそこを横から叩くとうなるか。

そう、彼女はてこの原理を利用したのだ。根元よりも、先端を叩いたほうが支点——この場合、首により多くの衝撃がかかる。

ましてや二メートルもあるつかという長さだ。支点にかかる力は計り知れない。

最大の武器が思わぬ弱点になってしまった。彼女が勝てたのは初めからそれを壊す事だけに専念したからであつただろう。

カンカンカンカンカンカーン。

ゴングの音と共に、大歓声で包まれた。

2: Heaven Or Hell (後書き)

第二話、いかがでしたでしょうか。一応この小説には「機械による闘い」というテーマがあるのですが、メカ臭さが余り出せなかったかもしれません。精進していきますので引き続き銀姫をよろしくお願いします。アドバイスや感想を常時心待ちにしています。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7802b/>

銀姫～シロガネヒメ～

2010年10月9日20時07分発行